諧謔莫昏日記

へ 5
1903
12

門へ 5
號巻

黄昏日記

十時落花逸著

一 爰に廟八人壬五十民仁明天皇嘉和十二年乙巳
寅京家小生徐ふ御父八乾若御母八健氏也氏
業の去れる事神〳〵
又る石のたりてふ和八えぬこ枝の扶殺もをきるし
一 寅のとりや熟の宵ふ後ヒセ〳〵ふはく〳〵の左形の月
在形ヒ南の御孫分こ比祢孫と胡毎ふ一遠て百日の
百鴻山へ立ちうひと立〳〵をこうちる和時八いかるる
大形を朱就セ法と云る前 蔵ひふ[illegible]く八人〳〵銘々

以出歌とゝ〳〵おれすゝ

一宮のかゝりに公家なるる枝ゝ六ッの花とゝ云ふ宮迎に
幸ふ事正月九日宮梅むの歌ゝ後ろ日後ろ
永谷村天神山貞昌院の神神変家所自化
きすしの宮の宮像　御城へ入せらるる後儀幸き
於塔院口伝

一武義風ち此ゝ志のを以ゝ義宗一の同地と云ふ所
公家とゝく後ゝ家遠多き枝ゝ家遠と云ふ改む事後
悪人と退治ゝ不忠と改む事ゝ自ら
持ゝ也

一桜所仙洞四月十八日御産の御祈願ゆゝ
立ゝて八年と後ゝのとうた世の所ゝ入る山を所
一後成ゝの孫ゝ行る八孫也後成の御年し定家
ゝ八後成四十九ノ年出生ゝ成ゝも又の名ゝ所つゝ
ゝふる四十四年後成ゝ九十三ゝ卒給ふ養八
事祈ゝの永明院の眞の山ゝ所ゝ忌日九九日
一後成ゝ老後ゝ述懐の和歌と宮家ゝ所ゝ送ゝ
宮ゝ世ゝと若き所ゝ形ゝ所ゝ世ゝ所ゝ形ゝ
一定家ゝ
宮ゝ所ゝ老ゝ八ゝ宮ゝの事も絶ゝ宮ゝ記世ゝ所ゝ

一ゑの羽織を見るに献上原流のゆし面とちゝ仕ゑの
世のゑの羽織ハ此人面祖し
一寛井其角ハ雲ゑ文世年ノ出生し又ハ高水
一利休居士ハ遠〳〵ゑ山ゆ
桜の葉のゆ高おく小家つゆる奥山ゆの居を時さ
を測ハ
夕月潮ゆ下るゆ木のゑゑ弗
古城跡ハ山水天井とゆ七
一古城浄ゆ小見人寄ゑとゆ不の文句ふゑりむく
と寄ゑんとゆふと葉行り解一ゑゑて感ゆ小栗

栗ゆ不成ハ成へ出ゆ年ゆ七小寄ゆ寄ゆ花ゆ出ゆ羽ゆうひと
ゆふゆとゆゆゆゆ成ゆ成ゆゆとゆ成ゆゆとゆ成ゆ
ゆ居ゆとゆむゆゆの折りゆとゆちゆゆゆ入ゆ成ゆゆ
一化ゆ内の狩也甲裝ゆ成へ下まゆ付
甲裝振へ令ゆ宮ゆふゆゆりゆゆ羽の新ゆ成ゆゆ
一紀ゆ名ゆ御殿ゆ伊義ゆ平ゆゆ義年ゆ桜垣の花ゆとゆ
出ゆ垂熊ゆ生ゆゆ力ゆ及ゆ成ゆむゆゆゆゆ
ゆゆ不成ゆ御前ゆゆく桜垣の一延ゆゆゆゆゆ
御意ゆけひゆゆひゆて今ゆ成ゆゆ仕ゆゆゆ
以〳〵ゆの御ゆを求ゆ秘花せゆゆ和ゆ山ゆのゆし

一水号法徳文章の歌

雲とのみ見てくる雲は多ふ　秋と知るこゝろ新しとひく

光緯經の一章歌

一見梅悟化戯之章　紀逸作

かゝりかゝり行ふ袋きやう　男ハ多歌の者と出ちう

この性光を慶ふ色ハ　さんかゝしも人ハ多ふ者ふ秋ハ

丈二

かゝりかゝり　雪と行とう　秋と辻者の辻ふ多ハ乳

るの悟るるのるとかこ　ものうさ世のうゝ物の後

丈三

かゝりかゝり　男ハ多歌ふ　秋と辻者の辻ふ多ハ乳

世と雲隠の悟ふ　ものうさ世のうゝ物の後

行と極る初　紀逸遠

行ゝ〳〵　雪のうちの雪の雪ハ行ふ　多もさ

雪の雪　秋ハ雪　花の悟る日ハ　ふ

雪　雪のとゝ　ふ　雪の世

一宗祇ハ紀伊の産し　飯尾氏子孫也　文ハ又ハ文

礼者の事人　同氏称　行の俗古今集と　文

設されそ　礼者の　と出ふ　連歌師　ちる　俗

号雅の守　ふ　教　ちと　少ふ　後　柏原院帝　文

二年七月三十日弦にいでて卒す墓は小田原早雲寺
ホとり

一高見元廣代陽明門の和歌
　まてしれ年経の雲のたえ〳〵は京とおのすみこそ

一琴　箏　箏弦
箏ホの時六弦なり　箏弦の時は三弦なるゆえ
箏弦と云ふ三数と六数数弦数　三弦は琵琶　琴　和琴
ひちりき　横笛　三弦は琵琶　琴　和琴

一寒山詩
ホ一　拾得人の一百年豈三百年と

ゆんや弦と学して然学まるるもかれ
一器は琴ホ人を平ホ　ホ　ホ　ホ
一糸繰搭くこの帝　女房の姫うし
一伝弱の家と貴時の歌
　琴の調べをたれ　ぬ者も聞くかな
　聞ホかりうれ　ホかりうもくとし　元後用
一詩乳山の句とうふ
　毎くとうて未ぬる花郭公　嵐雪
　秋とう時多程多の数刀彫　文角
　郭の麦搗の調うけて　牧定

一桃の葉

[illegible]

[illegible]

納[illegible]代と[illegible]

右[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一万葉集小葉の[illegible]

葉[illegible]

[illegible]

[illegible]

二年撰せられ續古今集小野宮太政大臣

[illegible]

及[illegible]

一七月十三日葉[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此包は頼れ候よしとて給りける程に何して云られけり
秘蔵して自由に云ん小屏風は座して此中の後と
長の
一 呼子所所日尾婦丈病を快家せ患を悦さへ
せし候る
疵もしる病も癒も病めなく丈夫にならん子哉
左中ら田中
一 菊お(?)の粗玄とて見候りて
本子の舎に捏塚あれども懐する行に殘に残中村の
蓋もるにとつゝく程に世に緋(?)の夜さへ
さしし
松里も菫の氣に花の絶
一 各く毎郷をとるやとて
純逸

此器てあんとこさ(?)ありて花は其の山に蜜(?)をかけて
一 青山養雲寺に一乗菓に然尼は去稿門院へつかへ
て十七八の頃よりかくれたものへ古や行ける
丈とむら人つかふこの丈高ちくせられは力の
あらはれをとひ計く弘稿ち鉄牛和尚に
帰して門に入りてと鉄に鉄牛気は去の
後も山の白翁和尚にふとゆくても家にあり
に参て白翁信用せし所その門弟の弟子
入く精したる大かゝを以て西阪を見て白哉
に帰し和尚志を感じて下に入りむを語
らる

昔ハ左ニ文書ニ炷キ薬ヲ
今入テニ禅林ニ焼ノ香 皮ヲ

いとゝ多と捨〳〵燈多のつゝゝ与孤の姿とゝひ
ゝゝ

一日蓮上人之ゝの和歌しゝ（るハ
之ゝゝる多のゝ乱ゝゝもゝれぬゝ之ゝぬ法ゝのゝ山風
竹の葉のうゝちハ毎ゝ他れゝもゝゝのゝ人ゝ忘ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ侍ゝ面ハ所風ゝゝ 和の葉ゝ
ゝゝゝゝ

一冠者ゝ石花月ゝ集序 紀逸ゝ

故堪侍ゝ氏大宮工修〳〵ゝひゝゝの多人

竹ゝ葉鶯ゝ赤鶏西鶏ゝゝ一貴妃ゝゝゝ〳〵
侍ゝ今宵ゝ赤ゝゝ昇ゝ西樓〳〵入ゝ和漢一流
ゝ服ゝ筆ゝ先ゝ小ゝゝゝゝゝ又ゝゝゝゝ

一 素絃ノ序 紀逸ゝ

閑ゝゝ墨ゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

と云ふ細殿の金服及び殿上おとゝて自
然ものれる憐れ屋下ふ入ゝ微ゝふ源氏一
情悦源氏ふ軍ん〳〵接近と書ふ上ふ行下さ
ふ行ふ寳ふ与ふ行ふの多ふ拾ん〳〵一蛾
ふ止ふ八諸ふ對戦ふ〳〵愁労ふ〳〵一國ふ〳〵
石愛と云〳〵ふの徳と拳〳〵ふ云ふの交教
義ふふ指と拾〳〵ふ〳〵ふ云と拾〳〵笑ひと云と
云と拾〳〵軍敵と云ふ〳〵むふのと云ふ傷る
而し〳〵序辞と加ふ〳〵弟と軍ふ拾ツ

長歌

紀逸述

一邊月雲之の今宵のさゝ寄ふ〳〵庭和〳〵
塀〳〵電と移され〳〵角家作〳〵る塀やき家
二ツ張のゝ〳〵華ひうちて打〳〵の落尾ふ〳〵
刈葺〳〵く志ぶ様のゝ〳〵新さひる八水ふ
を一枝八ふふ森ちん〳〵海れ〳〵れふ〳〵塀の芝
さ〳〵れあして〳〵る幽玄生尾ふり懸の小貝八
と〳〵ふ〳〵る八ふの濱辺の舟き当と〳〵八
ふ平院ふ千賀人のゝ〳〵かと運と〳〵藤の多く
狩〳〵ふ拂〳〵ふ〳〵ちひ〳〵大長の風尾と服
おゝ〳〵おすのゝ〳〵ふの長歌の住真出ふる八

一てきのつゆ流くるる時は水月と成るゝ
八百月ゆく濱小船と跡を捨ひ〳〵そえの
塩竈小ゆるゝと成る船待り味ひ〳〵
因幡やう小浪ふ〳〵さゝやもと旅く敷名殘
旅路のさびとなる〳〵事て風雅の余情今宵小月
舟〳〵き拾ひの数〳〵し一角一ゝて八若〳〵の蟬ふ〳〵
陸奥言ゝるくゝち宵えゝるゝ宵ふ雪れ一天ゝ
ゝ〳〵ゝ雪とこそ也雪とちゝて陸光粧すゝ
やゝし一帯のゆたか〳〵れゝ〳〵藤と乃ゝて〳〵ゝ
もおゝゝとかゝやり拾〳〵沢と情むゝ今宵ゝて

珠ふゝ今の数ちゝ〳〵〳〵やゝゝち嘯〳〵東方の色
ふゝゝゝんとするゝと云〳〵沢ゝ七句
塩竈ふ月と成ひく粧ゝ帯
月すむや志ゝ木の陰のきゝ〳〵
月ふ悩〳〵輪ふちゝる　ゝゝ帯
夕れゝ粧と云ゝる蔵の雪
秋月ふ生〳〵　ゝゝる松雪ふ
名を飛とゝきれぬ月のふ雲ふ
塩竈やゝる沢月の松一末

純逸ゝ

一葉の集序

後水尾院集

おくの菊の世の明るこゝろ小され菊梅と高野根やハ
橘の菊小春ハ人とゝもてくゝその沢山撰の百首部ろ
菊と義ゝまさろるの人とゝもの一ツ梅ハ底原の新
雑集小梅と白ゝ白一ゝ多ひちるゝ一ゝとゝ雑集
小和ハ八ゝ沢とゝ花ハ世小月ひ光せれ
年ゝ年ゝ年亭のれ歌と撰ゝて明ゝ年しされ
延暦のゝろより宮人延のゝ小ゝの白ひ人沢を
世沢ゝきの一ツ山花の後小花部一事梅寺を
一ツの梅とのゝ好ゝこの人ゝと未花ゝ田社石花と

句小紙ゝ一帖とゝ一帖ゝ後撰人寄小信せ行ゝ小
年ていさゝゝ序ゝ梅ゝと居ゝるゝ志ゝ
一寛暦巳甲戌八月十五日菊尚舗三十七年ゝ
享保ゝ年戊辰拾舗し

月舗と

むとふゝ新小ゝ多ゝ今年ゝ白ゝ月ゝ

ゝゝ　長味　　雨月

久ゝの井ゝる枝ゝとゝむとゝふゝ白ゝ小ゝ長の声小雪せ　石や立ゝ月ゝ

一祖信師未得神田湯子小信長沢ゝ帝ゝ祖父一所ゝ
新ゝ新ゝ新ゝ花と道ゝ小信ゝ長ゝ長ゝ帝ゝ長

[illegible]

一今月五日の書の趣延喜式に出るその比二向大
元のことを称と協とに成られし後南山寺
改風流人ゆゑ光小ちうまし低やうのあと深て
第帝のをうゝ[illegible]と教希とにふ

一神仏花の[illegible]年中行事歌会の源に云仏花を
十四日より花ゐるなこと三ヶ日の写こ世の法花の部花を
唱へ[illegible]古説の罪と懺悔するこ宮こ起る[illegible]年十二
月[illegible]ゆ[illegible]

一[illegible]吳神こ[illegible]小頃仏[illegible]小七句去し

一山荘こ鹿詩伯こ日荘[illegible]村廣人[illegible]ヶ別業ヲ
号荘小会山荘の名こ[illegible]
号荘の小会の山小[illegible]
風雅集文

[illegible]

一三[illegible]の風人[illegible]一[illegible]
[illegible]

一丹壱[illegible]

[illegible]

多面詩判就拙上ゝ表
　　二のゝ巳りゝゝゝてたゝ稱おゝ　紀逸
一宮再寺山殿氏の人　諱八等揚又備淚冊ゝと
稱ス小田氏にゝく備中赤濱の人し
一祐勢宮丹同時正信と号ス文炊分と称ス剃髮
ゝゝく祐勢と改む小田系の人し赤山殿小住く
逝侍ゝ人
一小雲宗丹三ゝと右同時の人鵜野元信ゝ
祐勢子小在宮帝法ゝ三と云ふ文小越ゝ人世ゝ
左法眼と称ゝゝ今鞆る寺の西小ゝ信氏の系ゝ

元信ゝ多表ゝゝ古信氏の民の人
一陣のさゝ小ゝゝ上人のきゝ世ゝ　てナ志と
やゝんとゝつけ給ふ　ゝ角とゝゝ妙ゝ
中てゝの氏ゝと云ゝ　ゝ志ハ行おゝくゝ入おゝハ
氣ゝふゝ袋ゝ　左一休三ゝ
一三家唯一心のゝゝとゝ　ゝ代女
　　石草りや夏一節の仏ゝり
一京都ゝゝ浦江行系ゝ計医ゝ（英と遊ゝゝゝん
の計医ゝ人ゝ　丈地殿（ゝゝゝ小ゝの地殿ゝ
浦江（ゝりけるゝ計医ゝてゝの姓名ゝ地殿へ

中上られし物語

一世後生不審晴 ひらるるとうとぶ一冊十二帖こと
然るに高野の山の六座所

一三条とのゝくうお七とかくその母と姉うりて
葬礼の帯のうらかうゝ姉うゝ欲し

一歌法の巻

一宮廷の夜詠り原ちくゝ

一武者小路家の歌

一法皇の号ハ花山院より始る事家入ハ五田清倍と
初歌とし

一今迄の様と申ふ字ハ歌語仮名のうち
のゝ書ハ歌語ハ歌ハ歌の都ゝ言葉
様のゝるとハ歌ハ

一法と年貢不礼法ハ号収ちるゝ一冊とハ
ちのふとハさわゝくよりと行ゝ物を納ハ行ゝ
ちらしのふとと

一武者小路家の歌

一法皇の号ハ花山院より始る事家入ハ五田清倍と
初歌とし

一 歌集載日 正月十五 二月九日 三月十四 四月
十四日 六月晦日 七月十六日 八月十五日 九月
十日 十月十日 十一月十六日 十二月十三日
右の日歌詠とりあつめられたり
一 仏の小あみだ堂に詠て所々に夫婦ともに彩ふ
かなたこなたの殿原とともに世の中の一切衆生と
うとすと作り
一 天竜寺さかの八幡宮 大徳寺 法花寺 宮内
一 句会詩歌の集会 紙屋
相国寺 法花寺 ものしりの会

元禄二年句とつゝけて見しに
俳諸と分ちもとし相ひ違ひたる(一)創のむつ
うしく論すれども又をこがましきことなり利生記に
曰相国寺一座ハ十眼
房ひらく一品抄ハ相国寺に死去
山上ふれるなしもと人他の人ゝ不日長寿のことを
貴ハ師匠をとゝに詠いつれとも探ゝ
十七日と校ひうけ月と神ふをくのたもひ
年ものと形ふれんかつたれ者さんやと
ゝゝふとをすくをと能く探ゝ雲ゝ

庭にふするのと時ゝ未年卯月末
夜半やいつ於しるらん海とし月中小さゆりの花の
とのゑ
一 守武ハ伊勢内宮神職也 誹諧に長し 高く世に
称ス 山崎宗鑑ハ与野弥之郎入道して其名高り
誹諧師と称し 犬筑波集を撰ス 能く云こ
松永貞徳ハ道於許と号 又長頭丸と云ふ 云
学才有 九條殿山云こ眞傳を得受又俳諧
師と成 承応二年 撰集数しる 寿年百二才卒
行はし辞ス井 弟子ハ皆人ハ也ふ
一 大坂宗因ハ西翁と梅翁とも云 又天満の天
神宮連歌の宗匠也し 誹諧師と云 古風を
破りて 天下に轉ス 談林の宗因風とて世上
出くり小児を用也
一 武蔵江戸本とふへ谷中公巴里也 松平右京大夫殿
高士家に寄りて一時世に於き 延宝年中
一 蝉丸と延宝秋の御子と云を本の関の板ゑ
延宝弟 八乃方ふく ゑ小立 寛永年九十二
ふく而 位行り延宝文年二千一四本の御 時古人
集と撰る 蝉丸集の紀文とハうくゑのうち 仁
二三人の御子と撰のふ名もりや 文蝉丸ハ六百月

ふかく法のことわりを小乗の学ぶ所なりとむすび
給ふ人々とかくこれを行ふ者一切の不理と称ぜらる
んとなり　十月十八日辛酉の夜の霊夢に
給ふ
一ふかく学問のあらん人は長伯雲の
ごとくなるべしとなむ仰せられ
給ふ
一西忍房聖言は佐野の者にして夜ごとに旅
宿を渡りとなふ眞の四度の行師の誂にて
授菩薩の日去の日二年欲仏ぶりの元弘十一年戊
申

十月十二日能登の旅宿にて小々卒又墓は大隅禁仲寺
ぶりの
一小幡天竺善薩は若狭の言張小くあると所のひしと
に祢徳天皇の御代なりあるべきなり
一天竺善薩は天竺にて果ちなくあるとのの
ふべしとそのの
一大隅禁師は陸奥の小野天徳寺の平山氏の家
門師匠師匠に投出ぶ
しくかの十人禁師の
の後に孤ぶ乃なくに
法と旅なるとそ
向ぶ我従来海小泊

如今南無阿彌陀佛と云ふ事なり此経
迦葉菩薩に宣給へ

一聖人出家の天竺の羅睺羅尊者の御戒師にて
一朝に一切の禅と修行と七日の禅の上に
法と説きのごとくやう
一婦子の聖人の道にの者と法の心者法
子供の親者と仏に不の農夫不信しむ
まるこしらへふんと拾ひすく小子の多く生れ
又
衣と衣者に法者小子者れ不とうと者へ

ちちるこころをそなへらるもけちこと
一仏ふんふ仏ふる法者の仏もるみ者とうや
衣行のふとの里小世小捨ましるものたり
者ふたるれ者に心の仏のたこと仏一行也
ちちに法意仏のあふたに捨てたること
あれも以前に并し上不逆意のに小等に
所をひとるふ敬らあれに仏に者也
有 死ることは生ることにたらに仏と秋の者
ることを仏と法者ふの目あれ者と也拾に
たるこことあの目者あれを拾すに多く仏行者と

ねかはくはせめて八人のそむるにすもひなし難かるまと
へる朝夕中々まふとすへからて病に所そもたんお
おもしろの今日乾日に来わりむをみて〳〵とおもし
くはともくはなも薪の穂に出て〳〵ひらき吉やうする
ともその白うし小取しかけを隠くしと始るすん
しくもおひとりの若すると鳴く〳〵は新なるくは夜
年小雪せんしと云ぬるにひすると鳴はす小雪まて
取ある稲ぬ者まて思ふとひいきにおかくさうし入る月に
むかひ孫をとらむる二ゐを教へ小糀ある親にと新けり
きえ阪稲を掛くはよろつを古き色一つの時め

覚くその家にまれん志るくなりとおもし年をとりぬる
るゝ家まれん四千歳くる千やく
何すとも何ゆ小伝をく代々の千年の累の月に柳をひ

一 神といふをこゝろ　地の河きくと是神
仏といふをこゝろ　称へあれはかるを是仏
人といふをこゝろ　今日ある事かると以て人といふ
一代のちからなる食と汁
此外に移し
右一体

一 事無何事ゝ伝の中の流にふる日ゝは〳〵もとふ移り事無何事

仏〳〵行く事をいとなみ

和尚房和尚の志の松京井筒屋十太郎兵衛

一屋さ稿をとゝ〳〵ひかせ〳〵なるゝ小まを遣はれなる小

十九日　路丘

仏房稿と彩ふ山樒と遣はれ〳〵た除之の一さ月

朝をとゝ〳〵あされ〳〵　之

喰〳〵ひとゝふいと時〳〵たる塔のしをかそう

日若星ゆ〳〵院をうの（院をとゝ出され）

ま〳〵若ゆ〳〵大豆の出るゝ小つ〳〵一の出地をそう

一廿日朱小の松〳〵古きゆ〳〵〳〵もこう出るゝ小

そゆふをこの花くゝ小ゆうけるゆ句をう地ス　敬西

〳〵ひすや大名屋ん　穀のれく　白峰

出ん中をとゝけ立えたまのう　彩るゝ小雪のう〳〵まる　舞月ゆ　賀賓

絵入のひ小〳〵切まに初松島　新人

口切や和中のをこと　むゝさ乾地　李棠

人口をせすとるのをふ　枯地ゆ　絮水

万栄のふう〳〵瓶路やうゆの花　碑明

為をの勢ひそめれ〳〵　郭ろ　西子

嶋声とすまく　廣義　秋の月　傳村
決く声と　梅の香ゆ　鶯の　茅風
花にうゝ去と　拾ふる法し　朱弦

何とおく　毎をふく　むや　風見州　基箭
行つゝ　のの木の子　雲もりナ之和　仝

紙逸な　後を　賀ゝ
不ふり　拾の　梅の　かつら　舟　紙敬
丁の声　声より　せつく　布ふら　仝
為もの　秋の　行りハ　ふゝ　紙　紙裳

紙　宴
紙　柏
紙　路
安　凡
紙　穂
紙　方女
仝
紙　臥
紙　亮
立　声

紙　瑠璃く　猫をサ　毋の　水こゝ
ふ　ふるや　声ふる　ふる　紙
吹く　方へ　声の　風ふ　鶯下ふ
ふゝ　菓や　已と　知ふ　鶯
双　古や　元大　月ふゝ　ふの　花
猫ふ　ちり　猫ふ　ふひゝ　や　山　樵
ま毋　ハきの　ふと　修　——　郭ふ
名月　や　涙　村ハ　ふ　ア　紙　秋の　裏
指人の　月ふ　腹ぬ　秋の　紙　裏
きれ　ふる　指の　役り　ふ　ゝ　さ　ず

鄙のをとゝ信りく咲かぬ菊
柳の葉の出ぬと山ゝ霧
明方ゝ月を眺ゝく竹の葉ら　玉水
焼米ハ子の振ひ袋入や　振子
籾入やんちき樹を捨ても　職卓
初丁や藤屋ゝく又一杯ら　紀見
けいせんゝ小ちゝるまもなく　紀貝
二三反時へ乗ふ地むゝ出ぬ　逸祇
行ゝりやこゝ皮ゝ小ゝ乗ふ何れ　仝
忘ゝ小ゝ女の琴を弾ゝく　紀山

八月や雲ゝ和ハさゝゝ五吾素袍　仝
八幡ゝゝハの葉ゝる花の兄　田旦
ゝを山や杉ゝ接ゝふ玄の峰　五藻
星多の宮ゝ兄ゝ小ゝる女ゝ神　竹ゝ社
秋風ゝ人ゝ小ゝゝゝゝる一ゝ小ゝ　旦馳
桐の葉の兄食ゝ居ゝ小ゝ　以水
芋掘ゝ杉ハ碓ゝら樹ゝの秋　紀井
初丁や田ゝ行ゝる水の陽ゝ　仝
大仏絵賛
祇園女人ゝ見ゝ立ゝ　田社

吉野へ矢尾拔へ〳〵紫山さら
大根の花へちり乱む板紫か　田社
印の宮の八日八夜拔ぬか　丹志
初雪と云ふ乱き葉の十月か　丹角
名月やうら拔ぬよハ　杉の新　久
宿代や牛の涎ひの　拔大井　純皐
柳桜や小の名ら拔ぬ　南圭
海辺秋風　和歌　杜谷
笠程分小志むしの海の拔りや
秋風うちたまめうら〳〵あて　苔之女

恨　恋
うゝてを宵待やおんみ待
中れ待ら木のつゝれちきりハ　苔之女
落花
冨士の根と云ふ小てみしのや　紅逸妻
さ拔を拔ぬ花の志ゝ書　けん女
夏部
ゆ夏の陰ゝとぬれ　部云　き子
こ笠の山とさして来ぬれ
拔月

石のうへにすしかけるの梅花　はん女
幾代の月のもとにとまるらん

庵の初雪

はつゆきのいとうん庵のもとに
なにとつゆうるれかの初雪　きせん

夏田夜

ふくかぜのなかに敷と聞るあり
あやめ門田のくろとこあるらん　きせん

表懸

あたうの役小倉くれたる
見えぬ志ばくさの表の河橋　きせん

七夕風

まれまれに逢の星のもるる涼
たなばたの夜そ行方の川の音　きせん

浦の夏

うらの夏行小法師てふふるうん
くいむしの沓もちまちて　きせん

秋立恋

まるる限ハいとも志るぬ仇浪の
立田の川のうかさハるらん　きせん

春の雨と降てとゞまる物を　をちこち
つゆとなりし小舟をぬぎく
空の恋
はれとちりうきをきたる心うつろふ　をちこち
桜志ばめの中ふかくるし

波

今ハむしの音論路新と十四屋の
掌中のやうなる小さう色村うり法ひ
夢ふ志所　菅ゝ紙なるるくたり
さうとむあゝ紙に吳とおさんうゝこと
松をしつれくるるおらう　砂と
芙蓉日記と鄭ゝ　樟ふ所紙なるるを

寶暦十辰年霜月
江戸通本石町二丁目
前川權兵衛板
同呉服町
萬屋彌市郎元